

元の文宗至順^①二年五月に成つた經世大典の政典中に驛傳の一門が存したことは、蘇天爵の元文類卷四十一に收めた經世大典序録の示す所である。經世大典が既に湮滅して、今日に傳はらないことは更めて言ふまでもないが、幸にしてこの一門は永樂大典中に取り入れられ、それを徐松が抄出して置いたのが、莫斯科のルミャンツェフ博物館 (Runjantzevskii Muzej) に藏せられてあるので、余は大正三年 (1914) 露西亞に遊んだ時に該博物館を訪ひ、諸種の苦心を重ねてその全部を抄了して歸つた^②。當時徐松の寫本の原本に相當する永樂大典が何處に藏せられて在るかに就いては聞知しなかつたが、後に大正八年 (1919) に至つて北京の市場に現はれ、書肆文求堂の手を通じて我が東洋文庫 (當時のモリソン文庫) の藏に歸することゝなつた。これが即ちこゝに印出されたものゝ原本である。かくて莫斯科に於ける徐松本抄寫に伴つた余の苦心は殆んど全く水泡に歸することになつたのであるが、余は今にして尙ほその事業の決して徒爾に非ざりしことを自から喜んで居る。當時血腥き歐洲大戰の風に吹き捲られた露西亞では、士人多くは筆を投じて戎軒を事とし、博物館の如きは縦覽を謝絶して閉鎖の情態に在つた際に、特種の手續を経て館内に入り、在留同胞諸子の同情と援助とを得て、僅に數日にしてこれを抄了する苦心と努力とを費した結果、この書と余が生涯とをして、斷たんとしても斷つ能はざる深き契縁を生ずるに至らしめたことを思ふが故である。この事無かつたならば、東洋文庫で本書を印出するに當つても、余は或はこの一篇を草する執着を有たなかつたであらう。

この永樂大典卷一萬九千四百十六以下卷一萬九千四百二十三に至る八卷、蘸字韻の下に收められた經世大典站赤の一門が經世大典序録に記されてある驛傳門に相當することは何人も疑はない所であらう。何となればこの站赤門